四方潜覧 二

人物筆法序

凡人物を畫小古人系心意を專しく摶書ちく古形を以て二十辨の間を出だ灌和と其変化を之り相違ありん枚目し支抑十辨ハ一曰錐畫点二曰鬭斜点三曰遲速点四曰急波点五曰岫雲点六曰禿筆点七曰暗過点八曰正鋒点九曰顕露点十曰南路点以上十点也是筆法此大意を説き之を以て三病の嫌ひなく手裏にゆるまる人物をなし時に法行ふ所を十点此内一点て得るにあらず尚ほ後世の為に古人乃發明を當ろ形し初心画術の助とす

筆法

754.260
FREER GALLERY OF ART
WASHINGTON, D. C.

一曰錐畫點

此錐画点は極真の筆法也石面に錐にてかく
ごとくより起る重かるを極とし遅速をあらはし称す
漢画にては丘文濤 揚寧 韋道 豊僧貫休
李龍眠 閻立徳 閻立本 周昉 呉道玄 韓求
朱繇 筆は筆法皆此画 和画にもあめては紙
本畫に 此法を用ひざれば事なし 此法は人物
のみにかぎらず十畫乃筆画を定て以て花鳥獣蟲
草木石水雲皆是にて此錐画は元来
写生の用は多れ本 始末より 此の法にて
変化して十体となりて生を動かさるの法なり

一錐画点の畧

右のごとくにいたりてはそのてんハその生をうつすを
おこる筆なれば極真なりといへども側筆を
もちてことに大事とすべし

此筆法ハふとくとも
わきかれて力を見すべし
ところ肉をうしなふ事をうらみる
ゆへにうごかさずしてよはからず手をあたる筆のいのちも
ふるふて筆の勢なり筆のとゞく所までもおさむる時は
自らよろし

二曰 濶斜點

此濶斜點ハ真の筆法なるを和漢ともに是を
用ふ 別して周文 宗丹 古法眼及び松栄
永徳 山楽 等ニいたるまで皆此法なり當流
の画家にも此筆法有りといへども粗其格
變化ありて雅筆なれとも古風の濶斜点を少
かりめけるを 又ここ今新ハ書ともあるべ
からに山水なとにハしまた幸ハ人ハ業になす多
ハ是を用ゆべし

二濶斜點の図

此筆ハ常におさへてとめる筆
筆先をとめて
まろらく筆さきさき
よく書べし

唐一家文常席の
ありさま絵をよく
かんかへし

三曰遲速點

遲速點ハ漢ふしてハ僧月蓬陳所翁蘇漢臣李平等ヶ画ニ此筆法をつたふ和朝ふおゐてハ周文宗旦或ハ可翁啟書記兆殿主等の筆法ニ多く見へたり中にも此乃急ニ山樂家にハ此法見へてり殿まで法ふ相ヶ未熟乃者の及さる筆法之修煉の後自つからにちそく手裏ふ出るへし

三遲速点の図

是ハ此くと見ゆる所書乃筆法之急ニ書くなつかしきを以て書なし筆をふるハもとふあらはれ候かして除く是也

筆のちこを
そいふん立てかくへし
文字ふもこうらう点を
ひとありまよかし似たるべし
なしのうとしるまでちをりよ

四曰急波點

此筆法ハ唐宋元の人皆好ミ用ゆ別てハ梁楷
馬和之 周文矩 元乃黄大癡 等の畫に多く
見へたり 和画にハ周徳 玉楽 雅楽助及ひ
法橋奥意等 此筆法あまた古風家の用
筆なり 當世ニ用ゆる人まれなり 此点
は各家の法なとを十筋ほど内をならて足
添ニ初め四本を書とし次ニ三本ハ行ごうし
終ニ二本を 草書筆法と 見得べし

四急波點の圖

此筆法ハ筆北ゆるんと思ふ所まてをうごかし ゆりて
その形をゆく所なり 意ニ行て亦くる筆もちのことし
是家の筆といふ影なり

五曰岫雲點

此法亦和漢ともに用ゆ　和にしては都て
土・雪・狩ともに用ゆ　漢よりハ無準　秋月
玉澗　呉道玄　李龍眠　曹弗興　禪月
等なり　衣文乃描　雲の出るかたちに
似たるをもって此筆法を名付たるもの也
古今和漢ともに此法を用ゆ

五岫雲点圖

此点ハ雲のたつるに
似たれは名付たるなし
耳くまて筆を

切くたるの衣文て
手てやしなひてかくさるゝ
とゝろく佛像に

周ゆき

六曰正鋒點

此正鋒は用る事和漢ともに知らし肖
六乃書化を別く中央にして真行草
乃三體のあまね備ふ其の生ハ真行草とも
に此筆法を離るゝ事なし例く用ひ
来る古人の名目残出せるを及ぶをも
趣へて用る
ごとろし

六正鋒点圖

筆ハかゝさきをたゞしくたて
常席の衣文を
ごとく

付くるし
行なれとも
真行草ハこゝろ一體にして真をなせし真行を
なせは行となる時の筆法くねよ十體乃中央なり

七曰暗過點

暗過點ハ第一乃鉤画点より第二の圓斜点
ヘ行合て行法ニ接しく家なりとそら諸
家ニ用ゆる右五六七乃三ツを行書の法
こして通例よくしらゆる所也是又用ひ
来る古人の名目ニ乃ミあれ別く古法眼ハ
和漢の諸家の法ニ明らかニ画きをさとる若
と摭掌握して一家の法とし故ニ才能乃
法ともニ用ひとといふ事なし人物のこゝろ
らを岩本ま勲書ニ添んで筆法を用也

七暗過点の図

此図ハ第二の圓斜点と
そのまゝをいへともあんきやハ
筆の前後とはなくおさへて
中をかろくも此暗過とは
お法様かろくしかく中を
かさへてをかり
この名
あんくわといふ

八日禿筆點

是ハ禿たる筆のいきおひなりと云
和漢古今ともに用し貴一乃錐画法
とす六乃正鋒點として行ひなし和らけ
たらば又ちびたる筆をもつて墨を
和らけたる術なり雪舟家狩野家
ならび当流乃畫家勿論拙法をもつ
畫に志未熟の人乃及ひたれ

筆法

八禿筆點圖

此筆ハおさゆるよりゆるんとおよ
ひまてとく小行ても
さきの切

たる筆をとりかへに
用ゆるふわらそちびたる筆ふくら紙る かすらく
ふそのかハとふくをそりて かの筆まゝかりつきさる
とかきとやうとに

九日顯露點

是も筆くたくなり和漢ともに用ゆる所なり
孫君澤 張思恭 等乃筆にまゝつくなり
和の筆者ハ無之 其外諸家是までの筆
法ハ筆勢紙肉無法にみかこさきを正しくを
出すなり 此顯露の法ハ筆のゆくふまうせ
筆勢をわすてふかくいふえ 然故に乃ん
ろき名をとらはやかその
師鏡なり 當代皆々此法を 白ん

九 顯露點図

筆の勢わるくあし
あまり不もさびし

筆さきも破きはなくも
いかにそせんよしとも
見するを筆しれ筆の
さらにもあるまし
きらふなるへし

十曰南路點

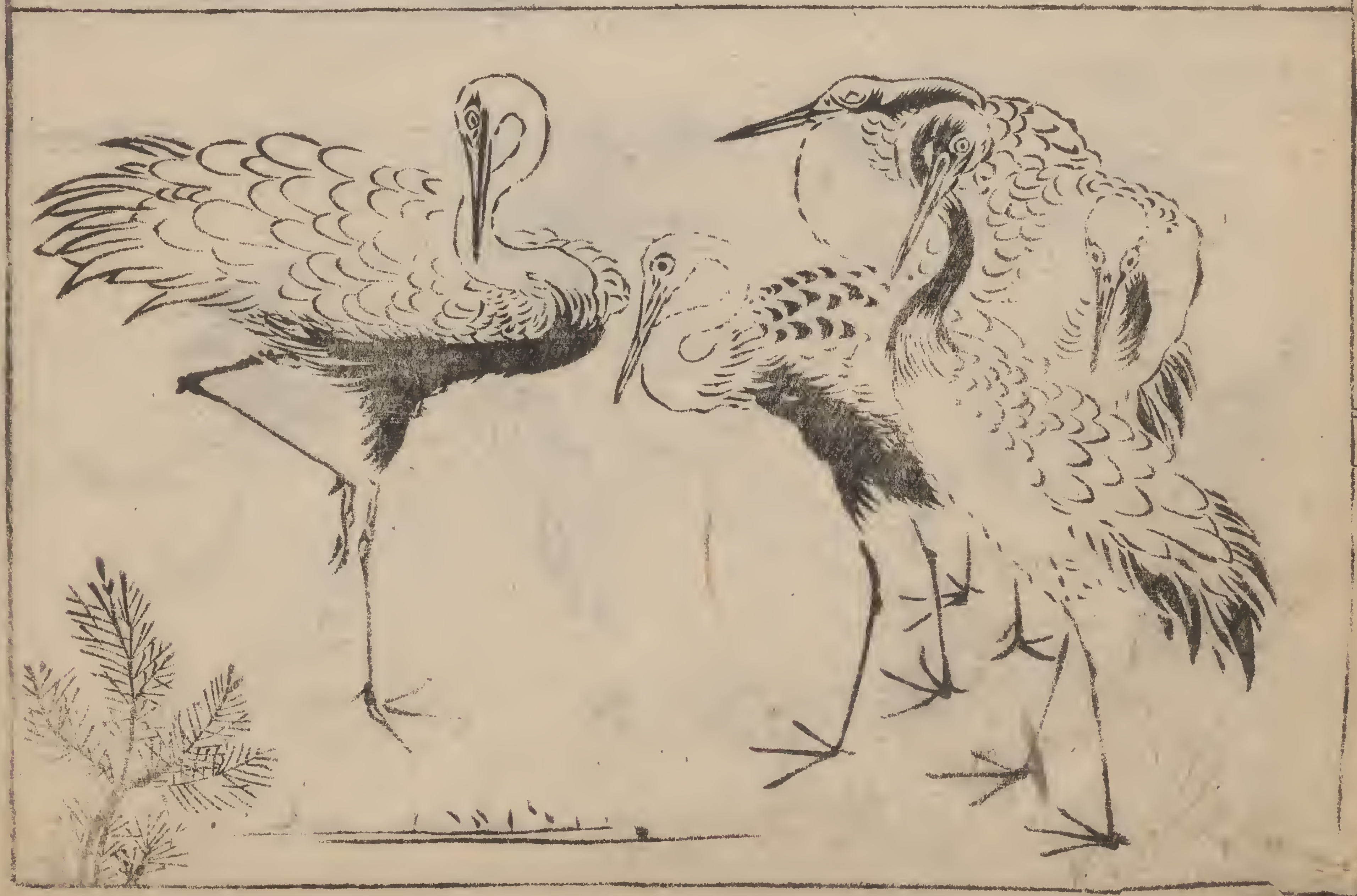
澤ふ志く八牧溪 玉硼 顏輝 辛翁 月山
閻次平 高然暉 米元章 等なりくらう
和よおゐて八雪舟 雪村 等顏 雲溪 宗丹
探幽 永真 主馬 或ハ等伯 友松 等皆
此法をゑれたる草畫の法 破筆 飛白等
手ふ応ふてとらべとも 十八九十 三ふの内を
出れバ藁筆 刷毛をもちひて なすとも皆此法を
失ひ八 応るかことく 行ハあらさるかことし 草ハ是を
ふるゝか如く 次第ふ意如筆をもちふへし

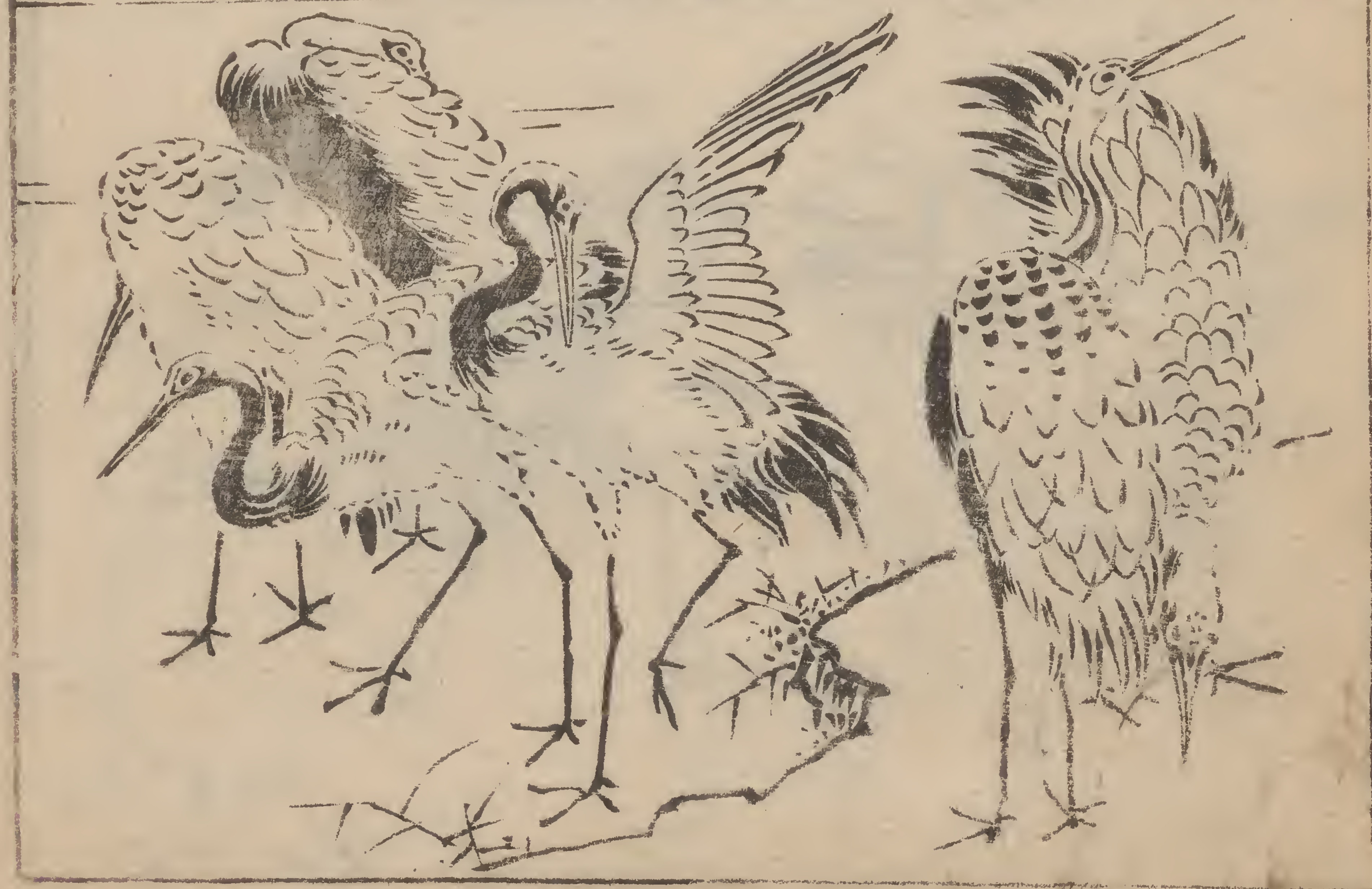
十南路點の畫

草の筆ハ墨汁渋滞を去り
少しも泥まさしきもとをと
ころろく 草書乃手つれ

馬鶴

探幽百馬百鶴圖巻物寫　本ノマヽ





馬數百三疋
延寶二甲寅年五月日
法印探幽守信行歳七十三筆

鶴數百二羽
探幽法眼守信筆

754
.m8